

Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより 第43回

歩兵第五十九連隊

歩兵第五十九連隊密門と
兵士たち



「武運めでたき宇都宮 神風そよぐ一荒山 宝木原に屯せる 栃木歩兵の精銳は 野州男児の其中を 備び放きたるつはものぞ」。これは栃木連隊と称され、第十四師団の中核を担った歩兵第五十九連隊の連隊歌である。その駐屯地は、歌詞にある通りかつての旧国本村宝木一帯。現在の「とちぎ福祉プラザ」、「県営若草園地」周辺にあたる。

歩兵第五十九連隊は千葉県習志野で編成されたのは、日露戦争末期の一九〇五(明治三十八)年七月。当初、同連隊は第十五師団に属し満州に出兵したが、一九〇七(明治四十)年三月、任が解かれ習志野に帰營した後、新設された第十四師

団に編入された経緯を持つ。初代連隊長は、愛媛県出身の陸軍中佐清水金生だ。

同連隊が、習志野から宇都宮に移駐したのは一九〇九(明治四十二)年五月二十九日。第十四師団隷下、最後の部隊として宇都宮駅から大通り、軍道を行進して宮門をくぐった。その数二千名余。部隊を率いる連隊長は、二代目となる岩満伸太郎中佐だ。日光街道には、先に着任した歩兵六十六連隊ら各部隊の将兵が整列しこれを出迎えたといい。

郷土部隊と親しみを込めて呼ばれた第五十九連隊の主力は、栃木県を中心に関東各地から徴兵された甲種合格の若者たちだ。その頑強ぶりはのちの戦いで遺憾なく発揮され精銳の名をほしいままにした。宇都宮駐屯以降、一九〇九(大正八)年のシベリア出兵を皮切りに、三(昭和六)年の満州事変、三三年の上海事変、そして三八(昭和十三年)年の徐州作戦に出動。その戦歴戦功に枚挙の暇がない。

一九四〇(昭和十五年)年八月からは、第十四師団の満州永久駐屯決定と共に連隊は北満のチチハルに移駐。関東軍の隷下、ソビエトとの国境に部隊を展開、対ソ戦に備え国境警備の任についた。酷寒の地にお



宮庭に整列した将兵と連隊長

ける任務と猛訓練はさぞかし過酷なものだったと容易に想像がつく。

第十四師団は、太平洋戦争末期の一九四四(昭和十九)年四月、南洋諸島パラオへの転進命令により、パラオ本島およびペリリュー島、アンガウル島に部隊を布陣。第五十九連隊はアンガウル島の守備についた。同年七月十四日、守備隊は第二大隊を残してパラオ本島防備の命を受け転進。この転進命令の際、連隊長江口八郎大佐は二個大隊だけ残すのはまことに忍びがたい」と師団長に意見具申をしたが叶わなかった。十月十九日、アンガウル守備隊は米軍との大攻防の末に全滅した。戦死者千五百十名。生還者はわずかに五十九名だった。